あなたの知らないガリバー旅行記

阿刀田高

あなたの知らないガリバー旅行記

新潮文庫　　あ－7－10

昭和六十三年四月十五日　印刷
昭和六十三年四月二十五日　発行

著者　阿刀田高
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六―五一一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替東京四―八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦　製本・憲専堂製本株式会社
© Takashi Atôda 1985　Printed in Japan

ISBN4-10-125510-5 C0195

新潮文庫

あなたの知らないガリバー旅行記

阿刀田　高　著

新潮社版

4044

目　次

小人国の風景……七
卵はどこから割るか……二五
グロテスクな女体……四三
もし教育の国へ行ったなら……六三
百科全書の作り方……八一
人は死すべきもの……九九
孔子は七十にして馬になる……一一九
ないない尽しの国……一三七
読心家具はいかが……一五五

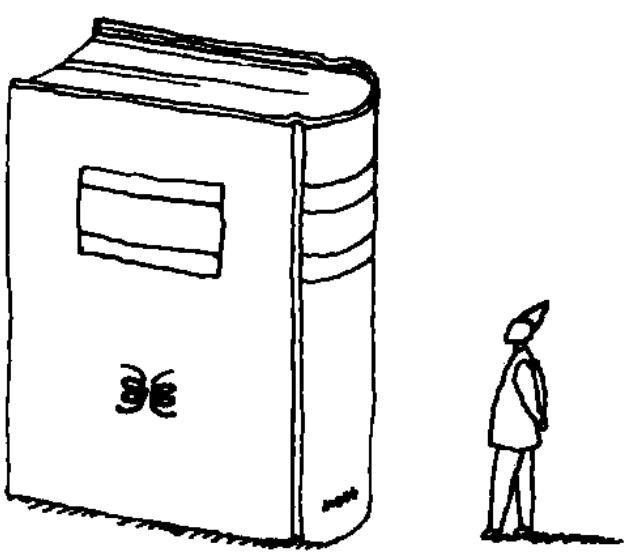
此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

死とともに消ゆ……一七三
貧しい人に愛の手を……一九三
白いときには黒を言う……二一一

解説　長部三郎
カット　矢吹申彦

あなたの知らないガリバー旅行記

小人国の風景



ジョナサン・スウィフトと言っても、すぐにはだれのことか思い出せないかもしれない。
「どこかで聞いた人ね」
「かもめのジョナサンていうの、あったじゃない」
などと見当ちがいの連想を抱く人もいるのかもしれない。
だが〝ガリバー旅行記〟の作者ということなら、だれでも、
「ああ、そうだったわね」
と頷くだろう。
船が難破して、知らない島に泳ぎ着く。疲労のあまり海岸で意識を失っていると、耳もとにいくつもの小さな声が響く。身を起こそうとしたが、どうにも起きあがれない。どうやら縄で地面に縛られているらしい。ようやく眼の端でとらえた風景……やや、これは小人たちの国……。そこでガリバーが体験する珍しい出来事はきっと童話か幼年向けの小説として読んだことがあるだろう。
私も幼い頃に講談社の童話全集かなにかでこれを読んでいるはずなのだが、そのときの記憶はほとんどなにもない。
よく覚えているのは、中学二年生のとき。英語のテキストに短い〝ガリバー旅行記〟が載

っていた。テキストは文部省が編んだ“Let's learn English”。昭和二十三年。敗戦後の世情がようやく落ち着き始めた頃だった。つい数年前までは敵性言語として排斥されていた英語も進駐軍の上陸とともににわかにあつい眼差しで眺められるようになっていた。「カム・カム・エブリボディ。ハウ・ドゥ・ユー・ドゥ。アンド・ハウ・アー・ユー。ウオンチュウ・ハブ・サム・キャンディズ、ワン・アンド・ツー・アンド・スリー・フォー・ファイブ……」

ラジオの英語講座が人気を集め、私も胸を弾ませて憧れの国の言葉を学び始めていた。〝ガリバー旅行記〟を載せたテキストの初めの数行は、“Gulliver was a doctor. He went to sea”

ではなかったか。そんな記憶がある。

教師に指さされて私はこの部分を訳した。

「ガリバーは医者でした。彼は海へ行きました」

「ちがうな」

「はあ?」

教師は黒板に二つの英文を書いた。

「He went to sea とHe went to the sea とではちがうんだ」

なにを言われたのかよくわからなかった。教師は“the”のあるなしによって英語の意味

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

にちがいのあることを教えたのではなかったか。肝腎な中身のほうは覚えていない。今、辞書を引いてみると“go to sea”は〝船乗りになる〟と訳がついている。ただ〝海に行く〟のではないらしい。田舎の中学校にしてはレベルの高い授業だった。

本物の〝ガリバー旅行記〟を読んだのは、それから十年あまりたって国立国会図書館に勤務しているときだったろう。

〝ガリバー旅行記〟が童話などとはおよそ縁遠いものであることは、そのときの私はすでに知っていた。中野好夫氏が岩波書店刊行の〝図書〟誌にスウィフトについてのエッセイを連載しており、それがこの旅行記を読む直接の刺激になった。私自身、へそ曲がりのところがある。諷刺と黒いユーモアにはもともと関心が強かった。

――こりゃただの狐じゃないぞ――

それからはこの端倪すべからざる奇人についてひとかたならぬ興味を覚え、次々に著作を読んだ。図書館はこうした欲求にはまことにふさわしい職場であった。

私は大学でフランス文学を専攻したが、もしイギリス文学を学んでいたら、きっとスウィフトを論文のテーマに選んだのではあるまいか。

ジョナサン・スウィフトは、世界の文学史に冠たる超一流の作家ではないのかもしれない。ここで超一流と言うのは、たとえばシェイクスピア、たとえばバルザック、ゲーテ、トルストイ、ドストエフスキイなどなどである。スウィフトは作品の数も少ないし、完成度におい

てもこれらの大家に比べておおいに劣っている。だが、ユニークな作家であったことはまちがいない。一言で言えば、異端の度合いにおいて、彼は自分の生きた世紀をはるかに越えた作家であった。これはどなたも異論のないところだろう。

だが、その代表作である〝ガリバー旅行記〟でさえ満足に読んだ人は少ないのではあるまいか。

これからしばらくこの奇才の、人と作品を私なりに紹介してみよう。私自身の讃辞（オマージュ）であり、思考の方法論としてもまことに興味深いものを含んでいるのだから。

さし当たっては、まず世上に名高い〝ガリバー旅行記〟から筆をとるべきであろう。

若干の文学史的な知識を略記すれば、〝ガリバー旅行記〟――正しくは〝ルミュエル・ガリバー著・世界のさまざまな遠方民族への旅〟は一七二六年の発表で、スウィフトは五十九歳。作品は四部から成っている。第一部は〝リリパット国渡航記〟、第二部は〝ブロブディンナグ国渡航記〟、第三部は〝ラピュータ、バルニバービ、ラグナグ、グラブダブドリッブおよび日本への渡航記〟、そして第四部は〝フウイヌム国渡航記〟で、一般には、こんな舌を噛（か）みそうな名称より渡航したそれぞれの国の特徴をとらえて〝小人国渡航記〟〝大人国渡航記〟〝空飛ぶ島渡航記〟〝馬の国渡航記〟と呼ばれている。

原著には、出版者より読者へ宛（あ）てた解説もそえてあって、形式的にはルミュエル・ガリバー氏は実在の人物であり、数奇の航海記もすべて実話であるという体裁を装っている。

ちなみに言えば〝ガリバー〟は愚か者の意。このあたりに著者スウィフトの寓意が感じられなくもない。またいずれの渡航記も船が難破したり海賊に出会ったりした結果、心ならずも不思議な国にたどり着いてしまう形式を採っており、

――よく災難にあう人だなあ――

と感じないでもないけれど、なにしろ初めて出版された十八世紀初頭は航海そのものが大冒険であった時代である。現実に何度か遭難を体験した船乗りはいたであろうし、港町あたりには実際以上に数多い遭難体験をまことしやかに語る雄弁な旅行家も実在しただろう。また〝ガリバー旅行記〟の内容を知って〝これはフィクションだな〟と思う程度の常識はこの時代すでに大衆のものとなっていたが、大航海時代以来の気運を反映して、この手の虚実入り混った旅行譚はけっしてめずらしいものではなかった。たとえば著名な〝ロビンソン・クルーソー漂流記〟は〝ガリバー旅行記〟より七年前に同じイギリスで発表されている。

さて、第一部〝小人国渡航記〟には、ルミュエル・ガリバー氏の略歴が簡単に記されている。

それによれば〝私〟ルミュエル・ガリバーはノッティンガムシアの出身。男だけの五人の兄弟の三男で、ケンブリッジ大学のエマニュエル校で学んでいる。子弟の教育に熱心な平均的中産階級の出といったところかな。ロンドンの高名な医師ジェイムズ・ベイツ氏の書生となり医学を学ぶかたわら航海術などを学んだ。いずれ船医となり、見知らぬ国へ旅するのが

若きガリバー氏の願いであった。私が英語のテキストで習った“Gulliver was a doctor. He went to sea”は短いながら正しい記述であった。

ガリバーは結婚をし、しばらくはロンドンで開業医を営んだが、若い頃からの冒険家志望はやみがたい。船医となり、何度か航海をするうちに、特記すべき一六九九年の旅にめぐりあう。

ブリストルから東インドへ向かう途中、暴風雨にあい船はオーストラリア南方のタスマニア島の北西まで流され、迷走のあと岩礁に衝突して沈没。ガリバーは五人の乗組員と一緒にボートで逃がれたが、これも転覆し、必死に泳ぎ続けた。やがてガリバーだけが足の着く海底にたどり着き、一マイルもの距離を歩いて見知らぬ島へ到着する。そこが小人国なのだから、沖合いはしばらくは浅瀬であったろうと、あらかじめこまかに配慮がちゃんと張りめぐらされている。

ガリバーは嵐にあった地点を南緯三十度二分と記録しており、初版本には小人国を記した地図もそえてあって、そこには右上に（つまり北東に）スマトラのスンダ海峡が明瞭に記してある。地図だけから見れば現在のココス島付近のような気がするのだが、ここでは緯度が北過ぎるし、タスマニア付近から流れて来たにしては距離があり過ぎる。まことしやかに書いてはあるけれど、当然のことながら小人国の位置は不明確で、まあ、大ざっぱに言ってオーストラリアの西南部の海域あたりではあるまいか。わからない。

ともあれガリバーは見知らぬ島の海岸に着いて、初めは無人島と思ったらしい。疲労困憊のまま砂浜に倒れ、数時間眠ったのは童話などで読む通りであった。

眼をさますと、体が地面に縛りつけてある。髪の毛もしっかりと大地に結びつけてあるらしく顔を動かすこともできない。上を向いたままで空しか見えない。すでに日は昇り、じりじりと照りつけている。なにやら周囲に騒々しい物音があるが、だれがなにをやっているのかわからない。

小人との最初のめぐりあいの場面を引用すれば、

〝……しばらくすると、何か生きものが左足の上に登ってきて、もそもそ動く気配が感じられた。そのうちにその生きものはゆっくりと私の胸の上に乗っかってこちらに進んできて、仕舞いには顎のすぐ近くまで迫った。そこで私は、懸命に下目を使ってそちらを見ると、なんとそれが身の丈六インチにもみたないが、れっきとした人間だったのだ。しかも、手には弓と矢をもち、背中には箙を背負っていた〟（平井正穂氏訳〝ガリバー旅行記〟岩波クラシックスより引用。以下同）

となっている。

六インチと言えば約十五センチメートル。小人国の寸法はわれら人類の国々の十二分の一程度の縮尺になっているが、研究家の細かい調査によれば、この比率はかならずしもこれ以後すべてに渡って正確に守られているわけではないらしい。

私たちも、映画などで人間が巨大な生物や、微細な生物にめぐりあう風景を時折見ることがあるけれど、その縮小、拡大の比率は相当にいい加減で、苦笑させられることが多い。ゴジラは人間の何倍の背丈なのか。キングコングはどうなのか。場面によりかなりの差異があるようだ。映像に比べれば文章のほうがずっとごまかしやすいはずだが、いずれにせよ多少の狂いはご愛敬のうちだろう。私がざっと見たところでは、〝ガリバー旅行記〟は、むしろ相当正確に比率を守っているほうであり、このあたりにもスウィフトの偏執ぶりが窺えるような気がしてならない。

ここで小説家の内あけ話をするならば、作品の中核部が絵空事であればあるほど、その他の部分は事実として疑いのないような体裁を帯びているほうが望ましい。それが小説作法のテクニックである。どうせ作り話なのだからと思って、どこもかしこも嘘っぽいのは、小説としてのリアリティを欠くおそれがある。

私自身ずいぶん超現実的な作品を書いているけれど、そんな作品でも現実そのものを描いている部分はたくさんある。この部分はディテイルをしっかり書き込み、事実として矛盾のないよう最大の努力を払わなければいけない。作品の主要でない部分に確かな現実を書き込むことにより、やがて現われる絵空事を本当っぽく見せるわけである。

〝ガリバー旅行記〟について言えば、ガリバーの略歴、航海に出る動機、遭難の場面などは、作品にとってけっして主要な部分ではないけれど、このくだりは、私たちが実際見聞してい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com